

令和6年「年間優秀作品賞」決定

おやばと歌壇

長岡千尋 選

おやばと俳壇

権利風選

おやばと俳壇

権利風選

スーツとふ青銅の鎧まとひつつまたも始まる今日といふ日よ
富山 正源 一枝
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
長野 村上真裕美
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
大分 大海 里美

正源 一枝氏

「青銅の鎧」という比喩が、現代社会をよく象徴している。勤労というは義務ではなく、日本人にとっての使命である。この小さな島国を守るために人々は働くのである。企業戦士という現代語があるが、それは歌言葉にはならない。

村上真裕美氏
桜に託す日本人の感情は繊細で多彩である。桜はわが國最古の記録である『古事記』神代善に初出する。江戸の国学者・本居宣長著の『教訓の大和』大河内を問はず朝日匂く山桜花』は、大和心を山桜によって象徴した歌だ。

大海 里美氏
サンダルは物であるが、その物を歌にすることによって、サンダルに生命が与えられ、歌の三十音のなかの中核たる「生命の言葉の幸ふ國」という方華歌がある。

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

スーツとふ青銅の鎧まとひつつまたも始まる今日といふ日よ
富山 正源 一枝
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
長野 村上真裕美
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美

父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
富山 正源 一枝
薄紅の櫻を揺らす風に乗りひとひら君の袖に付きたり
長野 村上真裕美
父逝きて十年経ちし玄関に母を護りてサンダルのあり
大分 大海 里美